

# 森とともに生きて



## 黒滝村の樽丸について

森本 仙介（奈良県教育委員会文化財保存課主査・民俗文化財担当）

### 有形民俗文化財の 県指定

二〇一四年三月、黒滝村民俗資料館（黒滝村旧役場庁舎二階）に収集・整理された「黒滝の樽丸製作用具」一〇三点が奈良県の有形民俗文化財に指定された（※）。市町村所有のものでは民具による唯一の県指定である（ちなみに国の重要有形民俗文化財指定では十津川村の「十津川郷の山村生産用具」がある）。

二〇〇七年三月には樽丸製作用具を含む「吉野林業と林産加工用具」が国の重要有形民俗文化財、二〇〇八年三月に「吉野の樽丸製作技術」が国の重要無形民俗文化財に指定されており、今回の県指定も樽丸の製作技術に関する文化財指定の一連の流れの中にある。

いは丸師と呼んだ。

江戸時代、品質の優れた上方の酒は杉の酒樽に詰められ、馬や船によって江戸に送られたが、この間に酒には杉のキガ（木香）がついて独特の香りと味になり、江戸の人々に喜ばれた。

吉野ではその原材料として、節が無く真っ直ぐで、年輪の細かく素直に通った杉の大径木を生産する技術が発達したといわれている。材料となるスギは八〇年生以上のコウキ（古木のこ）である。真っ直ぐで、節のない、年輪幅が細かく均一に揃った木が良い樽丸材とされる。

杉は周辺部の辺材は白く、中心部の心材は赤い。前者をシロ（白）、後者をアカ（赤）という。アカは油を含み、腐りにくく、酒樽にすると酒に独特のキガを与える。シラとアカの境目両方を含むものはコオツキ（甲付）といって外側が白く、内側が赤い酒樽になり、最も上等とされた。

極端な密植と短期間の間伐を数多く繰り返し、長伐期とするところに吉野林業の特徴がある。植林の密度を高くすることで若い時期に木があまり生長せず、梢と元の太さにあまり差が出ず、年輪巾が狭く細くなる。これは酒樽の原料である樽丸の



樽丸（栗山晴昇氏提供）

（※）【有形民俗文化財指定に至るまで】  
「黒滝の樽丸製作用具」の大半は1990年前後に黒滝村によって収集されたものであり、今回の文化財指定は樽丸の製造工程を体系的に説明できる民具コレクションとして評価された結果である。指定の決め手は、資料の履歴書とでも言うべき調査票が当時黒滝村教育委員会におられた日浦義文氏を中心に記述・整理されていたことであり、昨年度、樽丸製造の記録映像の作成とともに民具と調査票の再整理が村の教育委員会によってなされていた。そもそも民具資料（有形民俗文化財）の「価値」はフィールドワークによる民俗誌データの有無、精粗により左右される。つまり、有形といえども民俗文化財の場合にはバックグラウンドとして無形民俗のデータが必要なのである。民具資料とは、それをとりまく村の生活や身体によって伝承されてきた職人の技術と切り離すことができないものなのである。

### 吉野林業について

吉野林業とは、正確には吉野川の上流域にある川上村、東吉野村、黒滝村の三村で構成されている地域の林業をいう。

吉野の材が多量に搬出されるようになったのは、天正年間、豊臣秀吉



樽丸の製造現場（吉野木材協同組合連合会提供）

が当地を領有し、大坂城や伏見城をはじめ、畿内の城郭建築その他、神社仏閣の普請用材の需要が増加し始めた頃からとされている。最大の木材消費地である大坂市場に近く、吉野川の水運によって和歌山、大坂への輸送が発達したことが、材木、林産物の商品化を進展させ、育成林業の発展を促した要因でもあった。

### 酒造業の発展と酒樽

近世初期、灘や伊丹方面の酒造業における技術革新と大量生産化にもない、酒樽の需要が激増した。清酒の大量生産と遠距離輸送が可能になったのは、桶や樽が作られるようになったからである。

実は日本において桶や樽が出現するのはそれほど古い時代ではなく、室町時代になってからだと言われている。丸師は原木のある山に小屋をかけた三人一組で仕事をした。一人がサキヤマ（先山）、一人がオオワリ（大割り）とコワリ（小割り）、そしてもう一人がケズリ（削り）をする。一丸は四斗樽にすると六個分になる。丸師のうち割り方と削り方は、二人一組で一日一〇丸作るのが標準の仕事量であった。

木は春に伐採し、現場で四ヶ月ほど乾燥させるので、七月の梅雨が明けると山に入り、正月まで盆と秋祭りのほかは家に帰らなかった。賃金は他の山仕事に比べて高額であり、黒滝村ではほとんどの男子は学校を卒業すると弟子入りし、丸師でないとハシソクモン（半人前の意）と揶揄されたという。

職人は吉野郡内だけでなく、クニイキ（国行き）といって、東北や北陸、山陰



サキヤマ（黒滝村教育委員会提供）



コワリとケズリ（栗山晴昇氏提供）

四国、九州など日本全国に出稼ぎした。

### 山村について

吉野で多くのお年寄りとお話をしていると、若い頃からいろいろな仕事を経験し、年中出稼ぎに行っていたという話をよく聞く。山村という言い意味で自給自足、悪く言えば交通の便が悪いために閉鎖的であるとのイメージを多くの人が持っているかもしれない。しかし、それは平野部の水田耕作的なモデル（これさえも大和朝廷のような中央集権国家が目指した「文明」であろう）を山村にあてはめているからではないだろうか。

黒滝村の樽丸は、灘や伊丹での酒造業の技術革新、清酒の江戸への大量輸送・消費といった全国的な流通・消費システムと直接的に結びついて発展したものであった。山村は常に人が行き交う解放された場所であり、都会の情報がいち早く取り入れることに積極的であった。丸師の出稼ぎも「技術」を輸出することであり、そこには山の生活から得られた自然に対する知識、民俗の知恵が凝縮されている。